

Оның аты Алматы その名はアルマトウ : カザフスタン調査滞在記

筆者は、松下幸之助記念財団日本人留学生として、カザフスタン・アルマトイ市に滞在している。ここでは、これまでの滞在を振り返りつつ、現地の生活や研究環境等について紹介したい。なお、現地で受講している授業、アルマトイから別都市へのアクセスについては、別の機会に譲ることとする。

私は、北海道大学の協定校であるアルファラビ名称カザフ国立大学に所属している。日本の年度に合わせたいという強い希望から、3月末から有効となるビザを発行してもらった。カザフスタンでは通常11か月分の学生ビザを発行するらしく、1年以上滞在する場合には、現地でビザの更新をするか、あるいは一度帰国し、カザフスタン大使館を経由して更新をする必要があるという。

ビザの発行に係る手続きは様々であるが、私の場合、知り合いの知り合いがカザフ国立大学の教員であったため、彼女が実質的な窓口となり、ビザ発給のための招待状を作成してくれた。招待状が完成するまでには、約1か月を要した。「金持ちはコネを持ちが現地では強い」とカザフ人の知り合いは語っていたが、今回はコネ以上に、北海道大学との関係を強化したいという、相手側の思惑も大きかったように思われる。

① 研究活動

私の研究テーマは、1960年代における中央アジア映画の自己表象である。現地では主にカザフ語やロシア語の資料を読みこみ、研究を進めている。調査対象は『カザフスタン・プラヴダ Казахстанская правда』や『カザフ文芸新聞 Қазақ әдебиеті』¹、当時の映画雑誌など多岐にわたるが、これらの資料はすべて国立図書館で閲覧が可能だ。

国立図書館の利用方法は簡単である。初回のみパスポートで登録を行い、2回目以降は利用者カードを使って入館する。コートや大きな荷物はクローケに預け、閉架にある資料をパソコンで請求する。蔵書検索システムで見当たらない場合は、カタログから探し、紙の伝票で請求をする。資料を受け取るのに20~60分ほどかかる。資料の受け取り場所は、資料のジャンルによって異なる。新聞などの刊行物は3階の刊行物ホール、カザフスタン発行の書籍は2階、外国書籍は3階の世界文学ルーム、そして芸術分野は1階の芸術ホールといった具合だ。請求した本を翌日以降

¹ 原題は『カザフ文学』を意味するが、文学に限らず芸術や文化全般を広く取り扱っているため、その実態に即した「文芸新聞」と訳した。

も使う場合、受付でその旨を伝えると受付で管理され閉架に返却されない。館内は Wi-Fi が使える。夏は暑く冬は寒い。

国立図書館の面白いところは、カザフスタンで発行された新聞や雑誌はもちろん、ロシアやウズベキスタンで発行された新聞雑誌を数多く取り揃えているところである。モスクワで発行された新聞『プラヴダ Правда』や『イズベスチヤ Известия』はもちろん、『映画芸術雑誌 Искусство кино』、『芸術雑誌 Искусство』、更にはウズベキスタンやクルグズスタンで発行されていた新聞や書籍を閲覧することができる。このため、ウズベキスタンやクルグズスタンでの調査の際には、アルマトゥで閲覧できなかった資料を優先的に調べる、といった効率的な進め方が可能だった。



(写真 1) 現地映画研究者が集うフォーラムに参加。(2025年12月筆者撮影)

調査を始めたころは、図書館の蔵書検索システムによるキーワード検索に頼ることが多かった。例えば、カザフ映画人のシャケン・アイマノフ氏のインタビューも、当初はその方法で収集を試みていた。『カザフ文芸新聞』に興味を惹かれ、1961年から読み進めていくと、検索では出てこなかった彼の発言が次々と見つかった。パソコンはあくまで補助ツールで、地道に資料を読み進めていくことが一番の近道であることを改めて思った。こうしたカザフ語資料を読み解く中で新たな発見があった。アイマノフは映画だけでなく、劇場にも積極的にコメントや改善案を出していたのだ。映画雑誌でもカザフ映画と他芸術を接続させることを重視する発言が見られた。彼は自身の作品を、映画という枠組みを超えた、より広い文化的文脈に位置付けようとしていたのではないかと感じことがある。そうした姿勢はアイマノフに限らず、『僕の名前はコジヤ Менін атым Кожа』を書いたサクパクバエフや、同作を映画化したカルサクバエフのインタビューからも見て取れる。これらカザフ語の資料は、従来の映画研究では光が当たってこなかったものも多く、今後の研究発展に大きく寄与すると考える。ちなみにカザフスタンの資料の探し方はウズベキスタンで応用できたが、クルグズスタンではあまりうまくいかなかった。1960年代、中央アジア各国はそれぞれ違う立場にあったために、新聞や雑誌の位置づけもまた異なるのだ。

図書館以外にも、アーカイブや街の本屋など資料をあたれる場所はたくさんある。中でもテレグラムのみで本を販売する個人収集家の販売リストはとても興味深い。彼の販売リストは、自身のその時々の関心による。例えば、カザフ文様に興味があればそのテーマの本が増えるし、ウイグル文化に興味があればまたその本が売りに出される。普通の本屋では見かけることができない貴重な本が多数並ぶ。なお支払いは現金払いのみ対応である。

研究フォーラムやシンポジウムにもたびたび参加し、知見を深める機会としている（写真 1）。現地の先生の勧めもあり、これまでにいくつかのシンポジウムを聴講し、時にはロシア語でプレゼンをする機会もあった。扱ったテーマは必ずしも私の研究テーマに直接関わるものではない。AI と人文知、中国映画研究者が語る文革後の潮流、「外国人にカザフ語をいかに教えるのか」など、私の関心に合わせて参加した。こうした場は、現在のカザフスタンの「学術的トレンド」を知る機会となっている。脱植民地化を意識したワークショップも多い。カザフの人々にとって、自国の歴史を再考することは重要な意味を持つ。その熱気はしばしば、研究者の英雄視にも繋がり、新たなナショナリズムの補強材として消費されているとも感じる。歴史の問い直しという営みは、アカデミアを超えて、国や民族の在り方と不可分に結びついていると改めて感じる。

② 寮の滞在

寮の生活も紹介したい。ここは小さなカザフ社会である。

留学初日、到着が 21 時を過ぎるためホテルを予約していたが、かつて日本に滞在していた現地の院生が気をきかせて段取りをつけてくれたようで、急遽初日から寮に入れることになった。しかし、いざ寮に到着すると私の部屋はなかった。なぜこんな時期に入居者が来るんだと文句を言われたが、挨拶として受け取った。しばらくすると部屋を案内された。警備のアパイ（年長者の女性を指す言葉）によれば、数日はこの部屋で過ごし、後でまた移動することだった。後に知ったことだが、寮内での引越しは珍しいことではない。その言葉の通り、私はその後 3 回も部屋を移すことになる。今住んでいる部屋は、ドアをこじ開けようとするアパイに鍵をかけて対抗し、これ以上引越しをしたくない！と立てこもって手に入れた大事な部屋だ。

「若手研究者の家 Дом молодых ученых」と呼ばれるこの寮には、正規の外国人留学生、現地の院生、大学教職員とその家族、短期滞在の出張者が暮らす。寮はメインキャンパス内に位置しており、街の中心部へもバスで 15 分ほどとアクセスが良い。本来、交換留学生は別の寮に割り当てられるらしいが、入居時期が 3 月と中途半端な時期で、空き部屋の確保が難しいことからこの寮になった。これまで、カザフスタン・アクタウ市、カラカルパクスタン、新疆から来た先生や、クルグズスタンから来た学生がこの寮に短期滞在しているのを見かけた。今は修士課程で学ぶ中国人の女性と一緒に暮らしている。同じ階にはイランから来たカザフ人の学生、寮の管理人、日本人の女子学生、韓国人やイラン人の先生が住んでおり、共同キッチンに行くとそれぞれ異なる雰囲気の料理を作っていてとても面白い。

部屋にはシャワーとトイレ、ベッド、机、いす、クローゼットが備え付けてあり、シャワールームを合わせて 8畳に満たないほどの大きさである。アルマトイの家賃は年々上がっている。ロシア・ウクライナ戦争によりロシアに行けない学生、ロシアからの疎開者の受け入れ、更にはカ

ザフスタンにおける中国の影響拡大による中国人留学生の増加により、街には外国人が増加している。アクセスが良いところで、かつ、日本と同等の生活水準の家に住むなら、最低でも月 600～700 米ドル（光熱費は含まれていることもあれば別のこともある）かかる。私の部屋は 100 米ドルほど（55,000 テンゲ）である。ちなみにこの部屋賃は学生の所属（学部生か院生か）や入寮時期によって異なるらしい。

寮の設備の話に戻ると、キッチンは共用で、冷蔵庫やコンロは混むこともある。キッチンには電子レンジはない。調理器具や皿などは自分で用意をする必要がある。私は日本人の学生さんに手伝ってもらい、バザールでキッチン周りのものを仕入れた。洗濯機も共用。しかし、洗濯機は部屋ごとに扱いが違うらしい。私の場合、寮の管理者のアパイに洗濯機を使いたいと話すと、教職員専用と思しき洗濯部屋の鍵を貸してくれる。混む時間を回避できれば、基本待たずに洗濯ができる。私は土日の朝 9 時（アパイたちの団らんの時間）に鍵を取りに行く。しかし他の学生たちは SNS の「洗濯グループチャット」で、利用順をめぐってもめているらしい。なぜ私がアパイたちの管理する洗濯機を使えるのかはわからないが、詳細を聞くと藪蛇になりかねないので、彼女たちの言うことをきいて洗濯機を使っている。



（写真 2）

新聞「Ана тілі 母語」の創刊 35 周年を祝うバナー（2025 年 5 月筆者撮影）。

寮にいるほとんどのアパイたちはカザフ語話者である。彼女たちはロシア語を理解するが、カザフ語で話すといろいろ教えてくれる。カザフスタンにおけるカザフ語とロシア語のバランスは年々複雑かつデリケートな問題になっている。街ではカザフ語を解さない店員への抗議が起こることもあった。ハリウッド映画の字幕や吹き替えにおいても、カザフ語の割合が増え、国立図書館でもカザフ語の更なる普及が目標として掲げられる（写真 2）など、カザフ語の運用は社会の大きな潮流になっている。それでも街全体はロシア語の使用場面も非常に多く、言語をめぐる人々の思いは複雑に絡み合っている。そのため、言語の話になるとヒートアップする人は珍しくない。自分たちの居場所を奪われたと感じるロシア語話者、ロシア語しか使えないカザフ人を否定するカザフ語話者、カザフ語とロシア語が混ざるアルマトゥっ子。私がカザフ語を学んでいるというと、カザフ語話者に褒められることも多い。私の意志とは別に、カザフ語を学んでいるという身体そのものが、「カザフ語の優位性」を補強するナショナリズムの装置と

して消費されるケースもまた多い。言語を学ぶということが、いかに政治的・社会的営みであるかを考えさせられる。

アパイたちは基本的に親切だが距離感は難しい。一度、日本からのお土産を渡そうとした際、賄賂に当たると判断されたのか受け取りを拒否された。カザフスタンでは国を挙げて賄賂対策に力を入れているが²、何が賄賂に当たるのかという境界線は人々の生活に深く根差している。とある知人は「助産師の機嫌を損ねたら、出産中嫌がらせをされるかもしれない。出産時に助産師に便宜を図ってもらうための金銭は、母子の健康のための投資だ」と割り切っていた。また別の知り合いは、大学入試の替え玉受験は、入学というサービスを買うための手段に過ぎないと語った。もちろん、国も何かしらの対策をとっており、アルマトゥ市は賄賂反対エッセイコンテストを開催したり、街には賄賂反対を掲げる広告が見られるが、それでも「非公式な手段」は、信頼できない社会・医療サービスや先行きの見えない未来から、自らを守るための安心材料、生存戦略として機能している。

寮での生活は、単なる文化の違いでは片付けられない彼らの強さを物語る。年長者を敬い、不便なところは人と人の助け合いによって乗り越え、寮のルールが決まつたら理由も説明されずに従うしかない。人々は困難が起きないようにあらかじめ対策をするのではなく、困難が起きたらマンパワーで物事を解決する。滞在中、一度寮で大きな火災が発生したが、寮の管理者は火事になったときを想定しておらず、更には寮生の管理名簿もないで、誰が無事なのかわからず、おそらく全員無事であろうということで話がまとまった（実際負傷者はいなかった）。そんなことがあっても、名簿を作ろうとか避難訓練をしようとかにはならず、また「その時」がきたら人々は力を合わせて乗り越えるのである。

ここまで、ざっくりと振り返った。この街にいると、時間の感覚がいろいろずれて、結果的に日本にいるときより健康的な生活を送っている。いろいろ将来を考えることもあるが、「その時」が来たら考えればよいのかな、とぼんやり思う。エネルギーに満たされた街だから、その激しさにイライラすることもあるし、落ち込んだ気持ちが強引に引き上げられて元気になることもある。いい街だな、と思う。

² カザフスタンの賄賂事情については岡奈津子『「賄賂」のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』（白水社、2019年）に詳しい。